



能楽師って
こんな仕事



能楽とは、日本の伝統芸能である能と狂言をあわせた言い方です。その能や狂言を演じることを職業としているのが能楽師です。

もっとも「日本の伝統芸能である能や狂言」と書きましたが、残念ながら、日本人でも

能楽に触れる機会があまり多くないのが実際のところ。私も大学の部活動として触れるまでほとんど知りませんでした。ですから、現代の能楽師には、その魅力を広くアピールしていくことも大切な仕事となっています。

また能楽師はアマチュアのお弟子さんたちにお教えすることも重要な仕事です。多くの能楽師は平日にお弟子さんたちの稽古をして、土日祝日に舞台に出演。その合間に自分の練習や事務的な仕事をする生活を送っています。

なお、成田美名子さんのマンガ『花よりも花の如く』（白泉社）は取材の行き届いた作品で、能楽師のイメージをつかむには良いと思いますので、ご紹介させていただきます。



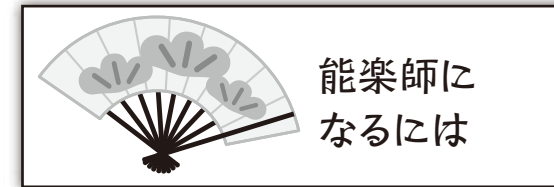
能楽にハマり
こんだ日々

私自身は大学で部活動として初めて能楽に触れました。ただし、入部したきっかけは単に勧誘を受けて居心地が良かったからで、能楽への興味はあまりありませんでした。

ただし、能の題材には、元々好きだった『平家物語』などの古典文学や、歴史上の事件が多く、そこが入口となって、少しずつ能や狂言に入り込んでいきました。

また、稽古を受けている内に、舞台の上で気を張っている緊張感が、少しずつ楽しくなってきたのです。もちろん、常に気を張り続けるのは疲れてしまっていますが、オン・オフの使い分け。それがとても心地よく、大切なものだと分かってくるのです。

能で習うのは「型」という長い歴史の中で形作られた、決まった演じ方です。しかし、その「型」の中に自分の入れようとするのは、実は逆に入りきらない自分に気づくことでした。しかし、まず「型」を学ぶことは重要で、入るべき「型」のないのは、自由なようでいて、実は単なる「型なし」であって、何物にもなれません。型を学び、守り、その上でも入りきらずに自然と出てくるもの。それが伝統芸能における個性であり表現だろうか…などと考えるようになったころには、相当能楽にハマりこんでいたようです。



能楽師に
なるには

プロになる具体的な方法としては、まずアマチュアとして能や狂言の稽古を始めてから、その先生のもとに改めてプロとして入門したい旨を申し上げ、書生に入る許可をいただくのが一般的です。私は大学生も後半になった三回生の正月に、師匠の神社で行われた奉納にお供させていただき、その帰り道に入門をお願いしましたが、その際にはお許し頂けませんでした。その後は一般企業に就職しましたが、稽古を続け、能楽堂に入り浸る中で、入門を許されました。

しかし現在は、大阪能楽養成会や国立能楽堂の養成事業などで一般公募も行われており、養成会に入ってから、実技の稽古を始める人もいます。なお、大阪能楽養成会は大学や高校に通いながらの所属も認められています。



個人事業主
として

能楽師は、修行中は師匠がすべての面倒を見ますが、一度独立すれば、それぞれの能楽師は個人事業主であり、基本的には自分の仕事は全て自分で行わねばなりません。ですから、どんなことであっても

役に立たないものはないと思います。能楽に直接関係がないことでも、得意分野を持っていることはその人の強みになり得ます。

例えば、自ら公演を企画して、お客さんを集めるには、企画や宣伝のノウハウが必要です。また、チケット代・出演費などお金の計算は避けて通れませんから、数字に強くExcelが使いこなせると非常に有利でしょう。能楽の魅力を発信したいと思えば、プレゼンテーションの技術も必要です。歴史や文化に強いと、能楽と関連付けやすいため役立ちます。また、お弟子さんたちの稽古では、お弟子さんたちとの円滑なコミュニケーションと、人を集め引っ張っていくリーダーシップが大切です。

能楽師が能や狂言を演じることは、基本ではありませんが、逆にいえば当然のことですので、独立して以降は、どのように独り立ちしてやっていくかで真価が問われるのです。結局は「能楽師になる」は最終目標ではなく、「どんな能楽師になりたいのか」「能楽師として何を為すのか」が重要なのだと感じています。

